

サークル

夢見屋さん

百合のクリスマス

R-18
成人指定
ADULTS

「ふう」

私の名前は古明地さと。旧地獄、灼熱地獄跡に建てた地霊殿の主だ。こうして光の差し込まない六畳一間の自室に籠っては、趣味の恋愛小説を書くのが毎日の日課。

何を根暗なと自分でも思う時もあるが、私は覚り妖怪なのだから仕方ないと割り切っている。

なんせ、人妖如何に問わず思考を汲み取ってしまうのだから、気持ち悪がつて誰も近づいて来てくれない。

「お・ね・え・ちゃーん」

「ひっ！」

「ひっどーい。そんなにビックリしなくてもいいじゃない！」

そういうえば例外があった。目の前で頬を膨らませ、いかにもなプンプン顔を見せてくるこの少女こそ、私の妹——古明地こいしだ。

こいしは覚りの力がきっかけで過去に深い心の傷を負った。「こんな力要らない！」と泣き叫び、覚りの象徴である第三の目（サードアイ）へとナイ

フを突き立て、自ら潰してしまった。

当時はシヨックと喪失感からか、ひどく塞ぎこんで目も当てられなかった。

「消えてしまいたい……」が、こいしの口癖だった。

それがこいしの意味なのか神の意味なのかは私にはわからないが、次第に私でさえ補足出来ない無意識な存在へと昇華していった。

こうして、自らの存在をアピールする時以外は……。

お陰で私はいつもこいしの不意打ちに合い、ペロペロと耳や頬を舐められる始末。

幸いな事に、私やペット達には全くと言って良い程敵対心がなく、愛情に満ち溢れているのが救いだ。

だが、最近はそうも言えなくなってきた。

理由は過剰とも思える程の愛情表現。最初は後ろから笑顔で抱きついたり、手を握ってきたりが主だったのだが、最近はどこで覚えたのかイキナリ敏感な部分を刺激してくる。

私もいちいち反応しなければいいのかもしれないが、不意打ちという事も相まってなかなか上手く対処できない。

その上、妙に手馴れているのだ。

全く、私の可愛いこいしに吹聴した奴を一度ぎゃふんと懲らしめなければいけないな。

「ねえねえ、お姉ちゃん」

「なに？」

「私ね、お風呂入りたくないな」

「お風呂は少し前に入ったばかりでしょ？」

「ええー。もう六時間も経つよ？ 折角おくうにお風呂炊かせてるのに？」

「こら、おくうをこき使っちゃダメでしょ？」

「だってえ……私、お姉ちゃんの事大好きなんだもん」

ダメだ。そんな風につば広の帽子を深く被り、鮮やかなエメラルドグリーンの瞳が鈍く濁ると、私の方があたふたしてしまふ。

「……ハア。わかったわ」

「やったあ！ お姉ちゃん大好き！」

悲しそうに俯くこいしの頬に手をやり、薄く緑がかかった癖のあるセミロ
ングの髪を優しく梳いてあげると、満面の笑みを返してくれる。

いつもこの調子だ。私はどうやっても妹には勝てそうに無い。
姉バカという奴なのだろう……。

袖口黒い黄色のペプラムブラウスに、ラナンキュラスが描かれた深緑の膝
丈フレアスカートを腰部分でベルトのように縛る紫サードアイの体幹は、ハ
ートの形を模っている。余程嬉しいのだろうな。

黒色のキューバンヒールをコツコツと響かせ、ステンドグラスから淡い光
が差し込む地霊殿の長い廊下を、二人手をつなぎ大浴場へと歩を進める。

木目調で整えられた広々脱衣所に入るや否や、盛大に脱ぎ散らかし、膨ら
みかけの可愛らしい胸をプルプルと揺らし抱きついてくる。

「ちゃんと衣服を整えなきゃダメでしょ？」

「えへへ。我慢出来なかったの。お姉ちゃんも早く脱いで脱いで？」

「あっ、こら！　ちよつと、やめ……ひゃっ」

「お姉ちゃん可愛い」

こいしとお揃いの補色衣服を強引に脱がされると、ピンク色の乳首へと盛大に吸い付かれる。

姉妹揃って小さな胸を放り出し、脱衣所で一体何をやっているのかと意識を引き戻されかけたが、余りの気持ちよさに気をやりかけてしまった。

「ハアハア。こいし……本当、まつ……んんッ！」

「お姉ちゃんって本当、感じやすいよね」

「んぐっ。そんな乳首ばかり吸わ……あん」

「じゃあこんなのはどうか？」

「ひぐっ！」

「指で弾いただけなのに乳首こんなにぶっくりさせて……可愛い」

本当、どうにかなってしまいそうだ。

なし崩し的に床に押し付けられ、体の隅々まで貪られてしまう。指でコリコリと乳首を弄られ、時にはギュと強く絞られる。お陰で息も絶

え絶えで、気付けば子宮もキュンキュンと疼いている始末。
そんな私の心情を知ってか知らずか、強引に唇を塞ぎ、頭はぼおーっと意識が遠のいていく。

ダメだ……このままじゃイカされる。
そう思った矢先……。

「体もほぐれたし一緒に風呂入ろ？」

「えっ……ええ」

なんで？　なんでそこで止めちゃうの？　こんなの生殺しにも程がある。
意識と快楽の狭間で思考はグチャグチャだ。

もっと、もっと触って欲しい。

あの柔らかかでキメ細やかな細かい指でもっと気持ち良くして欲しい。

けど、言えるはず無い。

そんな……そんなはしたない事。



この時ほど、こいしにサードアイがあればと悔やんでも悔やみきれない。心の瞳さえあれば、きつとこいしは察してくれたハズなのにと。

私の思惑など露知らず、ペタペタと重厚感溢れる御影石張りの浴場へと手を引かれ、そのままザブンと浴槽へと体を沈め俯くしかない私。

普段なら「体を洗ってからね」とたしなめる所なのだが、そんな余裕すらなかった。

こいしは一人そのまま浴室窓へと近づくと、湯温を調整しているペットのおくうとお燐に手を振っていた。

横から望む顔は無邪気そのものだ。

一体何を考えているのだろう。

「お姉ちゃん」

「なっ、なに？」

「そんな端っこでぼおっとして……どうしたの？」

「……考え事」

「ふーん。ねえねえ、お姉ちゃんが考えていた事当ててあげよっか？」
「……」

「本当は続きして欲しいんでしょ？」

完全に覚られている。

グイツと割り込み伺うこいしの顔は、本で読んだ淫魔サキュバスのソレそのものだった。

妖艶で、なんでも見透いていると言いたげな瞳で私を見つめ、チロっとヤラしく指を舐める。

何も言い返せないのを肯定と見たのか、こいしは優しく私の背に手を当て抱きかかえ、そつと耳元に囁くように息を吹きかける。

「お姉ちゃんってエッチなんだね」

「あっ……ッ！」

「フフッ」

後はもう、やられたい放題だった。

ついでにむように軽くフレレンチキスをされた瞬間、にゆるりと絡みつく小さな舌をねじ込まれてしまった。

「んんッ！」

「フフッ」

ほのかに香る甘い匂い。

ビリビリと頭に電撃が走り、成す術も無く一方的に責められ続ける。絶頂付近まで昂ぶらされた体は、私の意思などお構いなしに快楽を求め始める。気付けばこいしの動きに合わせるかのようにレロレロと舌を這わせ、ジュプジュプと激しく求め合う淫靡な水音が浴場中に木霊していた。

それがまた私達の気分を高めたのは言うまでも無い。

「お姉ちゃんばっかり気持ちよくなってズルいなあ」

「……ハアハア」

「私の乳首も弄って？　ほら、こんなにピンと張って切なそうでしょ？」

「こいし！」

「ああん。お姉ちゃん、大胆」

我慢出来なくなった私は浴槽の縁へとこいしの上半身をせり出させ、貪るようにキツク乳首を吸い上げる。

舌で弾く小ぶりで可愛らしいピンクの乳首は、性を知らない無垢な見た目とは裏腹に、硬くそそり立ち女を主張している。

無心で私は舌で転がし、吸い付き、時には甘噛みして絶え間なく刺激を与え続ける。

反対の可愛い乳房も人差し指と親指で優しく掴み揉み上げると、柔らかかな感触が徐々に張り出し、「気持ちいい」とさえずっているようだ。

「あっ、あん。お姉……ちゃん。あぐっ、気持ちいい」

「とっても可愛いわよ？　こいし」

「んあっ、やっぱりお姉ちゃんには、んんッ。敵わないよお……」
切なそうに息を切らし、トロけた顔を向けられてしまった。

嬉しい。

最愛の妹が私で感じてくれていたなんて……。
その事実がとつても甘美で刺激的だった。

もつと気持ちよくなつて欲しい。

気付けば思うより先に優しくこいしの陰核を弾いていた。

「あああん。お姉ちゃんビリビリするッ！」

「いいのよこいし。一杯感じて」

「お姉ちゃん、んぐっ、お姉ちゃん……お姉ちゃあああん！」

顔を振り乱し、食いしばった口尻から涎があふれ出している。

嬌声を上げて余程気持ちいいのだろう。こすり上げる私の腕を弱弱しく掴

み、完全に出来上がってしまった。

「ダメッ！ お姉ちゃん。クリ気持ち良過ぎて、私……イクッ」

一瞬大きく目を見開いたかと思いきや、ビクビクと体を震わせ仰け反って

しまった。

「ハアハア。好き、お姉ちゃん好き！ 大好き」

「私もよ、こいし」

息を切らせながら伝えられた精一杯の思い。
胸にキュンと直撃だ。

瞳をウルウルと潤わせ、優しい声色で伝えられたらもうダメだ。完全に私の心はこいしに釘付けた。

体で感じる充足感もいいが、心で繋がるのはもっと最高だ。
ああ、幸せ。

「お姉ちゃん……あのね？」

「どうしたの？」

「えへへ。お姉ちゃんに体洗ってもらいたいなあ。ダメ？」

「いいわよ」

「やったあ。お姉ちゃん大好き！」

しょうがない妹だ。

さっきまでアレほど感じていたというのに、ケロっとしたかと思うと満面の笑顔で抱きつかれてしまった。

ヨシヨシと優しく頭を撫でてあげ、再び湯船に浸かる。
体を温めた私達はその後、約束通り仲良く浴場でクシクシと体を洗い合う。

白くか細い腕に、しなやかな指。

膨らみかけの胸を優しく揉み洗い、両手で掴めきれてしまいそうなキュツと締まった腰にプリッと上向く可愛いお尻。

愛らしい体軀を支えるムチリとした太腿と細い足首と爪先。
どれも堪らなかつた。

一撫で毎にくすぐつたそうにしていたが、終始笑顔で私にとっても楽しい時間だつた。

時折おっぱいを揉まれたりと悪戯もされたが、それもまた良かった。

本当に最高のひと時だつた。

浴場から上がる頃にはハシヤギ疲れたのか、眠そうにコクコクと頭を揺らす、こいし。

「いいからそのまま寝てしまいなさい」と頭を撫でてあげると、嬉しそうに「スースー」と寝息を立て、寝てしまった。
いつ振りだろうか、こうしてこいしをおぶるのは……。

変わらないな。

いつだってこいしは私にとって天使だ。
願わくば、ずっとこうして幸せな時間を感じ続けたいものだ。

ベッドと簡単な調度品が置かれた寝室へと戻ると、手早く愛用のパジャマに着替え、二人揃って仲良くベッドスプレッドに身を包む。

無論こいしには私が薄黄色のパジャマを着させてあげた。

なんてことは無い。可愛い妹の着替えぐらい、ペットの手を借りずとも手早く済ませられる。

暖かな体をギュッと抱きしめ、頬を寄せるとほのかに香る柑橘石鹸の匂い。頭を撫でてあげると嬉しそうに微笑む。

一体どんな夢を見ているのだろうか。

ゆったりとした時間を過ごす内、気付けば私も寝てしまっていた。

そのまま休息の時間を共に享受するものだと思っていた。だが、意識が戻る頃には何やら股間がスースーする。

それだけならまだ良かったのだが、ピチャピチャと粘液が弾む音も微かに聞こえる。

一体何が起こっているのだろう。ぼおっとした頭で横を向くと居るハズのこいしが居ない……ん？　こいしが居ない？

こいしの姿が無い事に慌て、ガバっと上半身を起こすと共に強まる股間の刺激。

「ッ！」

もしやと思いベッドスプレッドをめくると、最愛の妹がハチミツでも舐めるかのように私の股間に顔を埋めている。

チロチロと伸ばした舌を、本格的に膣口へとジュルジュルグチュグチュと積極的に押し入れ、膣内をかき回すように舐め取られてしまう。

「ああん。こいしい……やめっ」

「おねえひゃん、きもひよくにやっひえね」



「気持ち良くなつてね」ではない。気持ち良過ぎるんだ。
不意打ちにも近い快楽の渦は一瞬にして私の脳髓を支配し、再び背を柔らかなベッドへと舞い戻らせる。

それからの私は良いように、こいしに弄ばれ続けた。

こいしの動きは本で読んだローターという玩具の動きにそっくりだった。腔内で強烈に振動でも起こされたように舌を腔壁へと高速で打ち付け、上下左右縦横無尽だった。

おまけにジュジュと激しく吸い上げられ、プクリと腫れ上がったクリトリスにも容赦なく指の腹をこすり付けてくる。

こんなの絶対無理だ。

抵抗出来るはずが無い。気持ち良過ぎる！

「ひゃっ、やめっ……あんっ。こい……し、ダメ！ イクイクイクイク！」
「きゃっ！」

頭で花火でも炸裂したかのように強烈な刺激は私の脳髓をトロけさせる。

朧げに見えた妹の顔には、盛大に粘液らしき水分が付着しており、嬉しそうに舐め取っては私に見せ付けてくる。

「……ハアハア」

「お姉ちゃん可愛い」

もう何も考えられない。このまま泥になってしまいそうだった。まどろみに包まれこのまま眠りにつきたいほど体が重い。

けど、こいしはそれを許してくれない。

「お姉ちゃん。私のも舐めて欲しいな」

「ッ！」

強引に私の頭へと馬乗り、でん部をこすりつけてくる。

股からしとどと溢れ濡れる愛液を、掬い取ってといわんがばかりに私の口元へと近づけてくる。

正直このまま寝てしまいそうだったが、必死に意識を繋ぎとめ、小陰唇へと舌を伸ばしピチャピチャと舐め取っていく。

「ううっ、気持ちいいよお」

こいしのアソコからはほのかに甘い匂いがした。

ピチヨピチヨとラブリュースで溢れていたおまんこは、舌を這わせる度に粘度を増し、大洪水だ。

「あっ、ああ……お姉ちゃん、お姉ちゃんッ！」

どうやら絶頂に近づいているのだろう。先ほどから発せられるこいしの声は艶かしく甘い。声色も上擦っている。

この頃には私の脳髄も少しはまともに機能し始めたのだろうか、それとも逆に興奮しすぎておかしくなったのか、妙に意識がクリアだ。

可愛い妹が可愛い声を上げて喜んでいっているという事実。

私はラストスパートとばかりに膣口を激しく貪り、柔らかな尻肉をぐにぐにと愛撫し続ける。

「ひゃあああ、スキッ！ お姉ちゃん好き。スキスキ、大好きい——ッ！」

「んんッ！」
ピュピュっと溢れ出た淫水をゴクゴクの飲み干していくと、幸せな感情と抜け落ちた疲労感に包まれ、体が弛緩してしまう。もうダメ……。

「……お姉ちゃん。大好き」

ふやけた顔でチュツと甘くキスされ笑顔になると、体を丸めた。
まるで胎児かのように私の胸へと頭を預け、寝息を立て始める。
ちよっぴリエッチで読めないところも多々にあるけど、愛情たっぷりのは
本当に可愛い。

こいしにサードアイが戻ればと願った事もあるが、今だから思える。
互いに意識が読めないからこそ楽しいんだ。

愛しい人と変わらないう愛を紡ぐために行動し、思索する。
その大切さを改めて認識されられた気がする。
それも、私自慢の妹にだ。

ありがとう、こいし。
ずっと一緒にいようね。大好きだよ。

こいしとさとりのイチヤラブ百合ックス
| 終わり |

■あとかき

この度は、「こいしとさとりのイチキャラブ百合ックス」をお求め頂き、ありがとうございます。

この本はツイッターでどんな本が読みたい？のアンケートで、一番多かったイチキャラブ（イチーぶ）百合ックスを具現化した本です。

どうせなら本として持ってないキャラで書きたいなーとの思いで、古明地イベント合わせでこいし・さとりメインにしたという感じですよ。

いかがでしたでしょうか？いつもはふたなりとか、リヨナ系が大好きで、そんなのばっかり書いていた私でしたが、微塵も出さないでスキスキイチキャラブー〇〇%で綴りました。

この本を通して、こいし・さとり好きの方にゆるーく届けばいいなあと、淡く思っております。

それでは、また違うお話でお会いしましょう！ さようなら。

奥付

こいしとさとのイチャラブ百合ックス

■この小説に携わった方

絵師名：うさ叉吉 様

サークル名：夢見屋さん

PN：夢見(ユメミ)

Twitter_ID:yumemiyasan

ブログアドレス：<http://yumemigatiyasan.blog.fc2.com/>

ECサイトアドレス：<http://www.yumemiyasan.jp/>

小説家になろう(創作)：<http://mypage.syosetu.com/524470/>

ノクターンノベルズ(創作R-18)：<http://xmypage.syosetu.com/x4740n/>

メールアドレス：yumemiyasan@hotmail.co.jp

DLsite.com_ID:RG23819 / <http://www.dlsite.com/>

売切ライトノベルをお求めの方はDLsite.comからお求め下さい。

メロンブックスDLでも電子作品を取り扱っています。

DLサイトトップ検索窓で「夢見屋さん」と検索願います<http://www.melonbooks.com/>

原作：上海アリス幻楽団 様
印刷：ちょ古っ都製本工房 様

Special Thanks: You

発行年月日：2016年06月26日

発行イベント：アンダーグラウンドカーニバル



本文
イラスト
ラサ又吉
夢見